

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

- 01 10代とともに 出会いが導く自分の道
- 04 地平線白書 ラボ国際交流 2023 (参加者レポート)
 - ・北米交流, オレゴン国際キャンプ, ニューージーランド交流, 韓国交流
 - ・日本語研修生受入れ, 北米青少年受入れ, 韓国青少年受入れ
- 08 Life Long Exchange! ~ホストと交流し続け40年!
- 09 韓国ラボ50周年/アメリカ4Hと合同会議開催
- 10 東京言語研究所 公開講座
「大人も子どもも楽しく学べる音声学入門」
- 11 Go Ahead! 三重県・奥啓太氏/Information



吉田彩乃(高1/福岡県・津野麻紀P) 2023年 ペンシルバニア州参加

今回の「10代とともに」には、世界の紛争地域で国際人道法の守護者として活動する赤十字国際委員会(ICRC)で任務にあられる淡路 愛さんをお招きしました。世界各地の戦争のニュースが続いていますが、世界にはなんと100以上もの紛争が起きているそうです。淡路さんの人生は通信社特派員時代をふくめ、「出かける」「出会う」「聞く・話す」の積み重ね。それらが現在のお仕事につながったようです。世界には出かけないとわからないさまざまな人の生活があり、喜びや苦勞があります。「地平線白書」では、海を越えて出かけた人、海を越えてやってきた来日者を受け入れた人の出会いの経験が書かれています。世界への入口はすぐそこです。出かけてみませんか？

出かけよう 出会おう

10代とともに



淡路 愛
Ai Awaji

上智大学法学部 国際関係法学科卒。米カリフォルニア大学サンディエゴ校 国際政策・戦略研究大学院修了。1994年、時事通信社に入社し、神戸総局記者、外信部記者、ニューヨーク特派員、ワシントン特派員などをつとめた後、退職。2014年に赤十字国際委員会 (ICRC) の職員となり、フィリピン、南スーダン、アフガニスタン、バングラデシュ、ナイジェリア、イラクの現場ミッションを歴任。2022年8月からイエメン代表部の保護部門次席調整官として紛争下における一般市民の保護活動に携わっている。

© ICRC

出会いが導く 自分の道

【※ 2023年9月末にインタビュー】

Q) 赴任地のイエメンはどんな国ですか？

いま私はアラビア半島の南側にあるイエメンの首都サナアにいます。ここは2,300mの高地にあって、夜は涼しいです。イエメン国内には世界最古のダムがあり、国土は日本の1.5倍。切り立った山がたくさんありますし、海もあり、砂漠もあります。また、イエメンは中東の国々のなかでも「食事のおいしい国」として知られています。牛肉とかヒツジの肉を煮込んだ料理もあれば、インドのビリヤニに似た炊きこみごはんもあります。美しい国です。私は登山が好きなので山にも行きたいのですが……。



2014年から、国際社会から認められた南部のイエメン政府と北部支配勢力とのあいだで紛争が続いています。2022年から「停戦」状態になり、サナアなど都市部は平穏を保っていて国内の南北間の移動も可能ですが、車で15分の場所に行くのに、武装兵士がいる前線避けて7時間かかることもあります。

戦闘で水道施設や病院なども破壊され、「世

中学生になる前から「世界でなにが起こっているか」に興味があったという淡路さん。高校生のときに熱望していた「アメリカへの留学」という夢を大学生になってかなえ、その後のお仕事を通じてさまざまな人に出会い、世界中の国や人々に視点が移っていきました。「世界を知る」とは「だれかに会おう」「なにかに出会おう」ということの積み重ね。出かけること、体感することのだいじさを教えていただきました。

界最悪の人道危機」といわれることもあります。また燃料や食料価格が高騰し、イエメンの通貨であるリアルルの貨幣価値が落ちてしまい、人口の約3分の2が海外からの人道援助に頼っています。いまはウクライナ戦争の影響もあって、支援が十分に届かなくなっています。

Q) どんなお仕事ですか？

私は「紛争のある国での人道支援」の仕事をしています。人道支援ってなんでしょう？紛争の影響を受ける市民に医療支援をしたり、食料や生活必需品を提供したりすることなどが知られていますが、私が所属するICRC（赤十字国際委員会）は違うかたちの支援活動もしています。

まずはICRCの歴史をお話しします。このマークを病院などで見たことはありますね。日本赤十字社が行っている献血でもよく知られています。



170年くらい前のことです。スイス人の実業家アンリー・デュナンは事業を拡大しようと考えて、北イタリアにいたナポレオン3世に会いに行きました。その頃イタリア統一戦争があり、旅の途中で激戦地ソルフェリーノの近くを通りかかると4万人もの死傷者が打ち捨てられているのを見ました。すぐに町の人々や旅人たちと協力して負傷者を教会に収

容するなど、懸命の救護をしました。

スイスに戻ったデュナンは戦争の悲惨な状況を語り伝えるとともに、『ソルフェリーノの思い出』（1862年）という本を出し、そのなかでこんなことを訴えました。

- (1) 戦場の負傷者と病人は敵味方の差別なく救護すること
- (2) そのための救護団体を平和なときから各国に組織すること
- (3) この目的のために国際的な条約を締結しておくこと

この本が反響を呼んで1863年に「ICRC」の前身となる組織ができ、国際条約も締結されました（ジュネーブ条約）。「敵味方の差別なく苦しんでいる人々を助ける」というデュナンの思想は、その後世界各国に誕生した「赤十字」「赤新月」社にも受け継がれていきます。ジュネーブ条約も発展していき、「非戦闘員を攻撃してはならない」などの、戦争時のルールを定めた国際人道法の軸となり、国連加盟国より多い196か国が加入しています。こうした経緯から、ICRCは国際人道法の番人・守護者の役割もっています。

私が所属している保護部門では国際人道法違反について紛争当事者にルールを守るように勧告したり、紛争が一般市民にどのような影響を与えているのかを調査し、ほかの部門と連携して援助をします。いま世界で紛争

10代とともに



が100以上も起きていて、ICRCは約100か国で活動しています。

Q) 武装勢力との交渉のセッティングは？

紛争国とはいえ、全土でつねに戦闘が起きているわけではありません。平時時から政府軍や武装勢力の上層部、また現場の司令官まで、あらゆるレベルで対話できるように関係性をつくる努力をしています。敵対する勢力の支配下にある市民を敵味方の差別なく公平に助けるために、紛争当事者のどちら側にも偏らず「中立」の立場で話をします。ICRCの活動資金に関しても、原則的には支援する国や目的を条件づけしないかたちで世界各国から提供を受けています。

Q) お仕事でむずかしいと感じることは？

人間関係です。ICRCのスタッフも宗教や文化背景はさまざま。相手の話を聞いて、なにを、なぜ、そのように主張しているのかをよく考えます。ただ相手のいう通りにするのではなくこちらからもいうべきことはあります。ちなみにイエメンの代表部内では英語をつかっていますが現場での交渉や調査などでは職員にアラビア語の通訳をお願いします。

Q) これまでの支援活動ではどんなことを？

この写真は南スーダンにいたときのものです。遠隔地に支援物資を届けるため、前もって反政府勢力のエリアにある倉庫に備蓄するための輸送でした。雨季は道路が使えません。乾季でも悪路で、時速15～20kmくらいで走り、ひじょうに暑かったです。



次の写真はイエメンの紛争関連で何年も拘束されていた双方の兵士を同時に解放し、故郷に送還するというオペレーションのときのもので。事前に収容所を訪ねて拘束されている兵士一人ひとりに面会し、解放後に移送される行く先に危険や不安がないかを確認したうえで、移送をロジスティクス面（一連の手続き）で支援しました。



Q) どんな子ども時代を過ごしましたか？

小学生のときはバスケットボールやバレーボールが好きで活発な、同時に人見知りするタイプでした。親の方針で自分の好きなテレビ番組は1日30分しか見られず、親が見る「海外特集」などの番組をいっしょに見ていたせいか「海外でなにが起きているか」に興味を抱くようになり、「国外に出たい」と思うようになりました。高校生になって英語を習得するために「アメリカに留学したい!」といましたが却下されてあきらめ、その後、国際関係法などを勉強できる大学に進みました。

Q) どんなきっかけでいまのお仕事に？

大学生のとき、ドイツのベルリンの壁が崩れ、湾岸戦争が始まるなど、世界情勢が大きく変動していました。ジャーナリズムに興味をもち始めて、交換留学でアメリカのミズーリ州に行きました。ジャーナリズムに関連する授業にも出て、新聞社や通信社で仕事をしたいと思うようになりました。帰国後に時事通信社に入社して数年後、2001年のアメリカ同時多発テロの2週間後に「特派員」とし

てニューヨークに赴任しました。

4年間そこで仕事をしていったん帰国し、今度はワシントンに赴任。このアメリカでの赴任中に、ニューヨークでは同時多発テロによって家族を失った人たちが、キューバでは大地震の被災者などに取材して、ジャーナリズムの仕事は好きだったのですが、アメリカなどの大国よりも途上国などの現場に軸足を移して貧困や紛争、自然災害などの問題に関わる仕事をしたいと思うようになり、ご縁をいただいてICRCに入りました。

Q) 危険な目に遭ったことは？

ICRCでは徹底した安全管理体制をしいているので私は危険な目に遭ったことはほとんどないです。ただリスクはゼロではありません。たとえば南スーダンにいたとき、ある地域で度重なる武力衝突があり、市場が焼きはられるということが何度もありました。焼け跡の市場で女性たちは自分が育てた野菜やニワトリを炎天下の地べたで売っていました。私はその女性たちのために屋根や品物売る台を備えた共同市場を作ったらどうかと提案し、実行することになりました。そしてその建設資材を陸路で運びました。

事前に輸送路上の軍部隊に連絡はとってありましたが、途中で運悪く武装した地元部族のグループに車列を止められ、「金を出せ」といわれました。当時その部族と別の部族とで緊張が高まっていたので、現地職員は「どこの部族だ!」と脅されましたが彼らと敵対する部族の出身者はいなかったのでお金などをとられただけで済んだということがありました。

Q) ICRCに就職するには？

私が試験を受けたときは、履歴書などを出し、審査を通った受験者がスイスのジュネーブの本部に呼ばれました。半日以上グループでいろいろな試験を受けたなかで、ロールプ

10代とともに



レイ形式のものもありました。

「食料備蓄のための倉庫を借りなければいけない。その貸主は、自分の部族に優先的に食料を配給しろ、とっている。この人を説得しなさい」というお題で、貸主に扮した人が厳しい質問をするので必死に考えました。

ICRCの公用語である英語、アラビア語、フランス語、スペイン語、ロシア語のうち2か国語以上を話せること、という条件もあります。当時は2か国語要件を緩和していたので私は英語だけで受験しましたが、語学力を重視する組織です。私の同僚でも5か国語を話すような人がゴロゴロいて少し肩身が狭いです。若いみなさんにはぜひ英語以外にもう1か国語、勉強を始めてほしいと思います。

それと緊急時のために「マニュアル車」の運転ができることや、最初の2年間は「どこでも」赴任すること、また、職務経験が最低2年は必要です。

10代のわかものへのメッセージ

いま「これになりたい！」なんて決まっていなくてもいいので、「これおもしろいな」とか「もっと知りたいな」と思ったことを一生懸命勉強してほしいと思います。インターネットで調べるのもかんたんな時代ですけど、自分の興味あることについて、遊びでも学校の勉強でもいいから、なるべく自分で足を運んで人に会って話を聞いたり、質問をぶつけたりすることをたくさんしてほしいです。そういう過程で新鮮な驚きがあったり、心を揺さぶられることがあるんですよ。

アフガニスタンで空爆によって家と家族を失った男性に聞きとり調査をしたときのこと。南部の、ものすごく保守的な地域で、親族以外の男女が話をしたり、男の人が女の人の名前をきくのも許されないような土地柄でしたが、男性は話をしながら私の前でおい

いと泣きだしたんです。そして「同じアフガン人でもだれも気にかけてくれないのに、安全な国から来たあなたがこんなに話を聞いてくれて驚いた」といいました。

こういうことがインターネットの情報では得られない「なにか」を自分のなかに残していくんですよ。そうした経験を重ねるうちに自分のなかにあるパッションが進むべきキャリアに導いてくれるんだと思うんですよ。経験、スキル、パッションが重なりあったことが私のいまの仕事に結びついているんです。「他人のために」という動機だけではなく、自分の興味があるからこの仕事をしているんです。みなさんにはいろいろな人について自分の道を見つけてほしいと思います。

(文責：編集部)

インタビューを終えて

[取材協力] 九州・沖縄のラボ・パーティ

吉永久美P、古賀千佳P、指方明子P(福岡県)、山浦明子P(熊本県)、松添早苗P(長崎県)、松崎美和子P(宮崎県)、安富祖惇子P(沖縄県)

吉永久美パーティ

●濱屋 杏(中2) 私は、紛争地域で急にICRCの方が行き、対話できるのだろうかとか疑問に思い質問しました。平穩時から関係づくりをしていると教えていただき納得しました。信頼関係を築くことで支援ができるのだと知りました。世界では100以上の紛争があるそうです。私にできることは少ないですがまずは知ることから始めてみたいです。●田中紀亘(高2) ぼくは安全な状況にいますが、あるきっかけでケニアの男の子のために募金をしています。ぼくは夏にラボ国際交流でケンタッキー州に行き、価値観も世界観も180°変わりました。おぼろげながら進む道が見えてきた気がします。淡路さんのように命をかけてできる仕事が見つかるかと思っています。●船越 遥(高2) 戦争にも最低限のルールがあると知りました。淡路さんは興味があったからいまの仕事についたとのこと。私の将来の夢は決まっていますが、それは「自分のため」「自分の興味」のもので、まわりの人の「人を助けたい。笑顔にしたい」という夢を聞くのが悩むことが。でもこのままでよいと思えました。終了後、いっしょに話を聞いた友だちと「すごかった

ね……世界って広いだね」と話し、夕日を見ながらふしぎな気持ちになりました。●渡邊亜優奈(高1) 「いまはかんたんに情報を得られるけれど実際に自分の目で見ないとわからないことがある。自分の目で見ることで育んだ感性が糧になる」という話が印象的でした。たくさんの人と出会い、体験し、視野を広げていきたいです。●庄山菜々子(高2) 紛争や人道支援についてのお話を聞き、生活を見直そうと思いました。現場でほかの国のスタッフたちと意見をいい合うということに感激。私は夏、ラボのニュージーランド交流に参加して多くの人と関わり、言語以外の壁がたくさんあると知りました。関係構築が紛争の情報のやり取りや支援のためにも重要とのこと。私は地域のボランティアからでも少しずつ挑戦していきます。

古賀千佳パーティ

●古賀 陽(高2) 私は将来、看護師になって、「国境なき医師団」に一度だけでも入りたいです。今回のお話を聞いたことが、とても貴重でしたし、夢にむかってがんばろうという気になれました。いつか現地でお会いできたらうれしいです！

指方明子パーティ

●藤川一樹(高2) 夏にラボでホームステイ(モンタナ州)をし、海外の方やそれに関する話を聴くことをこれまで積極的にしていなかったと感じました。日本人はコミュニケーションをとるとき積極的に話さず、ひかえめに相手の話を受け入れることが多いと感じました。でも淡路さんは宗教がそれぞれ違うなかで相手を尊重してコミュニケーションしながら自分の意見をしっかりと伝えたと聞きました。また自分の興味が将来につながるという話も参考になりました。

山浦明子パーティ

●吉田愛風(高2) 好きなこと、興味があることを仕事にするとするのはむずかしくて勇気がいると思うのに、親の反対もあったなかで達成した淡路さんがとてもかっこよく、私もそうなりたと思いました。また、負傷した兵隊さんも保護の対象になるというのをはじめて知りました。私はいま高2で台湾の大学に進学をしたいと考えています。グローバルに動く淡路さんのお話、ICRCで働いている方のお話でやっぱり世界をもっと知りたい、日本を出てグローバルな視点でものごとを考えていきたいという思いが強くなりました。

松添早苗パーティ

●川瀬大智(大3) 印象に残っているのが、「子どもの頃に理屈抜きでやりたいと思っていたことがいまに生きている」ということば。

もうすぐ就活、進学。いままでの自分にむきあってキャリア形成をしていくことのたいせつきをあらためて知る機会にもなりました。●長屋大和(中1) 人道支援といってもいろいろな種類の仕事があるとわかってとても勉強になりました。淡路さんがどういう状況でのような行動をするのかを聞いたとき自分の予想とは違ってびっくりしたところもありました。

松崎美和子パーティ

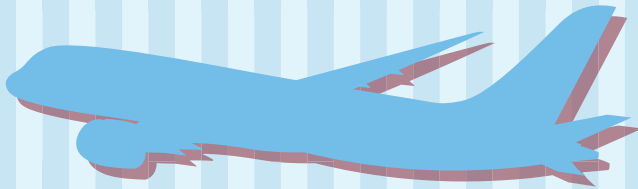
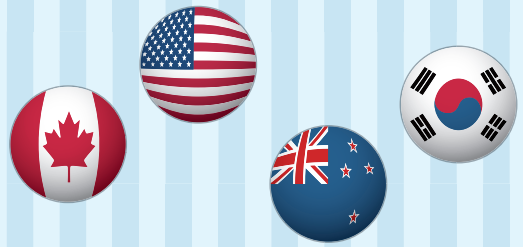
●ニコラス・ユウト・マツザキ(高3) She explained that Yemen has been marred by a devastating civil war that began in 2014, resulting in a humanitarian crisis of immense proportions. The conflict has left millions of Yemenis in dire need of humanitarian assistance like the Red Cross.

安富祖惇子パーティ

●安富祖すみれ(中3) 支援活動への考え方が大きく変わりました。海外青年協力隊に参加したいと思っていたのですが、そうした活動をボランティアにとどまらず仕事として長く続けられると知りました。しかし同時にさまざまな覚悟が必要だとわかりました。私は夏にラボ国際交流でニュージーランドに行きましたが、淡路さんがおっしゃった「相手のことも考えながら話す」ことのたいせつき、むずかしさも感じました。今回のお話ですます海外での支援活動をしたいと強く思いました。

地平線白書

ラボ国際交流 2023



ラボ国際交流プログラムが再開されて2年目の2023年夏。訪問プログラムだけでなく、受入れプログラムも再開され、さまざまな出会いと交流が生まれました。この夏の体験を、8名の参加者にレポートしていただきます。

北米交流



自分から行動することのたいせつさ

沼田峻助 (高1 / 神奈川県・木下裕子P)

訪問先：アメリカ・ニューヨーク州



ぼくの部屋はホストと2人部屋。ぼくはホストと距離を感じていて、いっしょの部屋にいるのにほとんど会話はありませんでした。ホストは夜遅くまで起きていて、部屋にあるテレビで映画を見ていました。一方早く寝たいぼくは、テレビの音量がうるさくて寝ることができませんでした。そういう日々を送るまま、気づけばホームステイは残り1週間。ぼくはホストと「仲のいい友だち」になれず、このままではいけないと強く思いました。

ぼくはホストといっしょに夜起きてみることにしました。するとふしぎなくらい話が盛り上がり、それからは毎日ホストと夜遅くまで起きて、たくさん話をしました。うまく英語にできないときは身ぶり手ぶりで会話をしました。ホストもぼくにむずかしい英語を身ぶり手ぶり、部屋の中はまるでラボのテーマ活動のようでした。どんどん距離が近くなり、ホストはぼくを“bro”と呼ぶようになりました。

別れのとき、ホストにいちばんの思い出を聞くと、「残りの数日 Yoyo とたくさん話せたこと」と話してくれました。一日だけいっしょに起きてみようという小さな挑戦が、ぼくとホストの距離をぐっと縮めてくれました。

うれしかったこと

ホストファザーは子どもを叱るとき“I'm not joking”といていた。ホームステイ最終日、ホストファザーは「きみはいつどんなときでも家に帰ってきていい」といつてくれた。笑いながら“Thank you.”というぼくに、ホストファザーは“I'm not joking”といつてくれた。



がんばった、努力した

よく聞くいい回しは積極的にまねした。気になった単語は電子辞書にスペルを打ちこんでもらったりしてホストに聞いた。何でもまずやってみた。まちがえることは悪いことじゃないと思うようにした。



北米交流



行かなきゃわからない

鈴木詩穂 (中3 / 滋賀県・関あずさP)

訪問先：カナダ・フリティッシュコロンビア州



はじめての海外。いろいろな感情がありました。まず不安。ホストファミリーと仲よくなれるか。結果、仲よくなりました！ ホストとバドミントンをしたり、ボートに乗ったり、妹と工作をしたり、ママとたくさん話したり、パパとバドミントンをしたり！

発見したこと

家の中はくつで入ってOK、お風呂はシャワーのみ、夜9時でも明るい。会ったらハグ、知らない人でも笑顔で“Hi! How are you?”, 目が合ったら頭を下げるんじゃないくニコって笑って手をふる。私はこれが大好きです!

次に喜び。単語をつないで相手の目を見て話して、ホストが“Yeah!”とってくれたとき、すごくうれしかったです。もちろん通じないときもあって、そのときは“one more time please”とってくれたり、翻訳機をつかったり、精一杯理解しようとしてくれました。

そして悲しみ。ホストがスマホを見ているあいだ、私はひとりでテレビを見てる。こんなことしにきたんじゃないけどなと思いつつ、日記を書いたり、ネコと遊んだり。でも「やっぱりいっしょにいたい!」と思ったので、おみやげを持っていたり、カードゲームに誘って大爆笑しながらプレイしたこともありました。

14歳でひとりで異国へ行く。行かなきゃわからないことがたくさんありました。日本もいいけど、またカナダに行きたい!!

いつもの返事を変えた

日本ではよく「どっちでもいい」というけど、外国人には“No”といわれるより悲しいし、困惑するという話を聞いた。“No”とはっきりいうことに少しとまどったけど、ホストファミリーは笑顔で“OK”とってくれた。ただ“No”というのじゃなくて、“No, thank you”といったほうがホストファミリーの笑顔が増えた気がした。



オレゴン国際キャンプ

いま見えている世界がすべてではない

春日博登 (中2 / 長野県・飯森麻衣P)

訪問先：アメリカ・オレゴン州、カリフォルニア州



自分の英語が伝わるか不安でしたが、勇気をだして話しかけてみると、思いのほか伝わるということがわかりました。私は気がつきました。伝えようとするだけで伝わるということ。そして、英語ができたほうが何倍も楽しくなるということ。なぜかという、地質の専門用語を調べずに化石博物館の展示パネルにとらめっこして、内容があまり入ってこなかったからです。

日本では起きて、水が流れるキレイなトイレに入って、冷たい水を飲んで、ふとんで寝る。これに対してなにも感じませんでした。しかし、それが場所によってあたりまえではなかったのです。日常をあたりまえと思わず、すべてに感謝することを学びました。

また、世界の広さを実感しました。森をずっと歩いているのに、風景がほとんど変わらなかったことがありました。砂漠地帯では、遠くからだと小さい丘に見えたのに、歩いて

地質学者アンドリューとの出会い

私は将来の夢が地質学者で、自由研究を見せたら、キャンプ中に手紙をくれた! それを解読するのがたのしかった。



自分で化石を発見できた

オレゴン国際キャンプに行こうと思ったきっかけの「化石の発掘」。実際にやってみたら枝や葉くらいしかとれなかった。でも石を観察してすき間を見つけてたいたら、大きな種子の化石を自分で見つけることができた。

みたら一周3時間もかかりました。また、同じ海なのに、海岸が違うだけでそこにある地質や生物がまったく違いました。あなたもぜひ、自分の目で広い世界を実感してみてください。



ニュージーランド交流



新しい世界が広がっていた

村部寿珠 (高2 / 徳島県・後藤直美P)

訪問先：ニュージーランド・タウランガ



ニュージーランドでは見たすべてのものが輝いていて、新しい世界が広がっていました。いちばんの思い出は、はじめて登山をしたことです。傾斜が大きく、登るのはたいへんでしたが、その先にある絶景に心を動かされました。「挑戦すること」のたいせつさを実感した体験でした。

学校ではランチタイムが2回あり、外で食べることには驚きました。はじめての体験でしたが、みんなで輪になって話しながら食べるランチはとてもおいしく、なによりとても楽しかったです。そして、スクールバディや学校の友だちと過ごした時間も最高の思い出となりました。日本から持参したおみやげや名刺をきっかけに話がはずむようになり、みんなが「Suzu!」と呼んでくれるようになりました。積極的

にみんなと話そうとしたことでたくさんの思い出をつくることができました。

私は、国際交流に参加したことで視野が広がりました。さまざまな考え方があってさまざまな文化がある。それらを肌で体験し、学ぶことができてよかったです。



いちばんの発見

音楽は国境を越える。ホストファミリーも私も音楽が大好きで、「このアーティスト知ってる?」「この曲いいよね!」とみんなでうたったり、曲をおすすめしあったり。国が違って、ひとつのことでつながることができるってこんなにうれしいことなんだと気づきました。



がんばった、努力した

学校の授業はむずかしい内容もがんばって理解しようと思いました。わからない単語はひたすら辞書で調べて、授業で先生に聞けるときは、すすんで質問するようにしました。



韓国交流

ことばができるともっと通じあえる

藁谷奈々美 (高3 / 岐阜県・藁谷昌夕実P)

訪問先：韓国・ソウル



私はK-POPが好きで、よりリアルな韓国を感じてみたかったので参加を決めました。韓国に行ったことはありましたが、家族の一員として過ごした1週間はいままでとはまったく異なる毎日でした。

中1で北米交流に参加したときは、かんたんな単語とジェスチャーで乗りきりましたが、今回は韓国語でコミュニケーションを取ることができました。ホストとはずっと前からの友だちのように夜中までおしゃべりする毎日が幸せでした。バスや地下鉄に乗って遊びに出かけたり、おいしいものを食べにいけないくらい楽しかったです。ホストも留学にむけ日本語を勉強中だったので、辞書には載っていないような最近のことばや略語、スラングなどをお互い学びあえるとてもいい機会でした。

韓国ラボキャンプを現地の子に負けにくい楽しめたのも、韓国語を勉強しておいてよかったと感じたこと

のひとつです。自分が思ったことをことばで表現できること、現地のことばを理解できることに大きな喜びを感じました。

高3なので参加を迷いましたが、日本で机にむかって勉強するより多くのことが得られたので、参加してほんとうによかったです。

がんばった、努力した

ホストファミリーとたくさんコミュニケーションをとること。キャンプなどで日本人がいるときもできるだけ現地の人と交流しようとしたこと。また、つねにメモ帳を持ち歩いて、はじめて知った単語はそのつどメモを取るようになりました。



うれしかったこと

「なんでこんなに韓国語じょうずなの?」「発音がいいね」などほめてもらったのがうれしかったです。キャンプ最終日にロッジ長(シニアメイト)に「韓国語で話したことを、日本のラボっ子に伝えてくれてありがとう、助かったよ」といわれ、もっと韓国語の勉強をがんばろうと思いました。



日本語研修生受入れ



受入れは尊い経験になった

大関真樹央 (小2 / 埼玉県・渡辺満貴子 P)



エティとはあそんだり、ジェスチャーや表情でコミュニケーションをとったりするうちに仲よくなりました。エティとキャッチボールや UNO をしてあそびました。UNO でぼくが負けそうなときに、エティがテーブルの下からカードをわたしてくれました。いろいろなところに出かけたのも楽しかったです。日光江戸村でさむらいのふくをあつそうにきていたことがありました。エティの昼ごはんは夜ごはんがときどきおなじことに、かぞくみんなわらっておどろいていました。

家族より

エティが日本で見て、ふれて、感じるすべての表情を見守るのが楽しかったです。納豆、梅干し、キムチ、めが漬、魚料理、生卵まで食べるエティの好奇心には驚きました。話すときにはあらかじめ調べておいたセンテンスを読みながら「体調どう?」「困っていることある?」「大好きだよ」など笑顔で伝えました。さよならの日、息子をいままでいちばん長く強くハグして、何回も「マキオ」と名前を呼んでいたのが印象的でした。エティの人生で一度しかない17歳の夏が、日本での思い出でいっぱいになるお手伝いができていたらうれしいです。



北米青少年受入れ

アメリカの「妹」を家族に紹介できた

阿部千紘 (高2 / 山形県・佐藤敬子 P)



中1で参加した北米交流が私の人生を広げてくれたので、Nicoleにもそうなってほしいと思っていました。「次に会ったときに楽しくおしゃべりするんだ!!」と英語を学んできたので、いっぱい話せてうれしかったです。風邪をひいたのに傘をささないで散歩に行きたい雨が好きな Nicole と、風邪を悪化させてほしくない私とでケンカをしたときは、ふたりで思いを伝えあいました。ことばで伝えあえるようになったからできることで、さらに仲が深まりました。ふたりとも音楽が大好きで、ダンスを踊ったり、うたったり、同じ趣味をもつ「姉妹」だからあじわえる幸せな時間でした。

帰ってしまったときはほんとうに悲しかったのですが、私も行って、Nicole も来て、「また会える自信」ができました。これからも姉妹仲よくつながってほしいです。

家族より

「私たち家族も笑顔で何でもトライしよう」。4年ぶりにニコルと再会する娘からのアドバイスでした。ありのままの日常をあじわってもらえるよう、必要なことはストレートに伝えながらコミュニケーションを楽しみました。娘の誕生日にサプライズでケーキをつくってくれたニコル。心と心がつながった瞬間でした。



韓国青少年受入れ

家族がもうひとり増えた

中山波瑠 (小6 / 神奈川県・平野真砂子 P)



ぼくは受入れがはじめてだったので、対面式のときにものすごくきんちょうしました。でもジュンソが明るく接して、えがおでいてくれたので、ぼくもすぐ楽になりました。ゲームをしたり、渋谷でいっしょに写真をとったりして仲よくなりました。いっ

しょに UNO をしてねたこと、東京タワーでおみやげをいっしょに買ったこと、ラーメンを食べたこと、ぜんぶ楽しい思い出です。ぼくのいえで飼っている犬がジュンソにほえて、ジュンソがおこっていました。コミュニケーションをとるときは、手を動かしたり、Google をつかったり、英語を話したりしました。ジュンソは英語がじょうずでした。ぼくもジュンソのようにもっとしゃべりたいなと思いました。

家族より

いっしょに過ごしていくうちに、ことばだけでなく心が通じあっていればコミュニケーションがとれることに気づきました。心が通いあうよう、お互いに限られた言語で相手を知ろうとしたり、家族のように衣食住をともにすることで、心の距離がぐっと近くなりました。家族が増えてとてもうれしいです。





Life Long Exchange!

～ホストと交流し続け40年！

40年ほど前に参加したラボ国際交流。それからこれまで12回も互いに訪問しあうたくて長いホストファミリーとの交流。40年たって娘さんがラボ国際交流に参加して新たなホストファミリーと出会い、生まれたときから親戚のようなファミリーとの再会がありました。なんという絆。長い物語を短くお聞きました。

稲垣 誠さん（静岡県・林 恵子P会員保護者／静岡県・川野美智子P，細谷邦子P O B）



ラボ・パーティに通う高1の次女の陽（まなか）のホームステイ先が決まったのは出発前2週間を切った頃でした。なかなか決定のお知らせが届かず家族でやきもきしていたところ、ようやく封筒がわが家の郵便受けに入ってきたのです。どんなホストファミリーが受け入れてくれることになったのか、当の本人と同じか、それ以上に親も気になるころでしたが、一刻も早く開封したい気持ちをぐっとこらえて娘の帰宅を待ったのでした。

娘が帰宅し、封筒を差し出すと、待ってましたといわんばかりに開封しはじめ、私もじっとそれをのぞきこみました。「ケンタッキーだって?」

「フライドチキン食べよういだね!」

「は?...」

「は?...」

「は?...」

ともかくにも娘はケンタッキー州ジョージタウンの Hostetler 家にお世話になることが決まりました。

なんと娘は私のホストファミリーと会える!

ようやく決まった娘のホームステイ先を、むかし私をホストしてくださった Niles 家にメールで知らせました。彼らの住所はインディアナ州のウェスト・ラファイエット。なんととなりの州で、地図を見ると車でたった4時間!? ああ、広大なアメリカにおいてはむしろ近い、ですよ。

「これで陽のステイ先にぼくのホストファミリーが会いに行ったりしたら、なかなかドラマチックだよなあ……」なんて妄想をしていたことは秘密です。が、まさに私の願っていた通りの返信が返ってきたのです! 「Manaka のホストファミリーに連絡して、会いに行く段取りをします。」

そこからはとんとん拍子。陽はホームステイ中の1日、Niles 家のみなさんと会うことになりました。わずか数日でスケジュール調整する Niles 家の行動力にはいつもながら感謝しました。

私がラボ国際交流で Niles 家のお世話になったのは1982年。なんと41年前です。当時の私はといえば、思春期に入りかけた生意気な中学生でしたので扱いにくかっただ



ろうと思いますが(親になつたいまはつくづく実感)、月並みな表現ですが、ステイ中、みなさんほんとうに私にしんせつに接してくれました。とくにホストマザーの Paulette さんは終始やさしくしてくれました。



わが家の娘たちは幼い頃から Niles 家の人たちにかわいがってもらいました

帰国後もエアメールなどで Niles 家とは連絡を取りつづけてきました。連絡手段がエアメールからEメールやSNSなどに変わることでもどんどん簡便かつ迅速化し、お互いの情報がほぼリアルタイムに伝えることができるようになり、実体験を通して進化を強く感じています。

1986年にはホストの Paul さんがラボ国際交流で来日し、それから私が大学時代に渡米して訪ねた後、私の新婚旅行、Paul さんの甥の Keith さんの大学卒業旅行時など、人生の節目には日米を行き来して交流を深め、最初のホームステイからの相互訪問回数は12回以上になります(私たちの渡米回数のほうが多いですが)。そしてなんと来春、また Niles 家はわが家に来られる予定です。

40年前にまかれた種～そしてまた新しい種

いまこうしてふり返ってみると41年前のホームステイでまかれた絆・友情の種が、手紙や訪問を続けてきたことで少しずつ、でも着実に成長し、気がつけば大樹にまで育ってきているような感覚を覚えます。そしてこの大樹に今夏、大きな果実が実りました。

陽は新しいホストファミリー宅でのステイでは野菜の収穫をして瓶詰め、煮沸消毒、蓋閉めの体験をし、フライドチキンの本場? で唐揚げを作ってくさん食べてもらい、さまざまに貴重な異文化体験をし、5歳ほど年下のホストとも後半にはかなり仲よくなれたようです。



そして、Niles 家との再会では Paul さんの甥の Austin さん (Keith さんの弟で、陽の9歳年上) と6年ぶりに会いました。とても社交的な彼は近況などたくさん話してくれて陽は楽しかったようです。わが家では頻りに Niles 家のことが話題にのぼるので、ひさびさに親戚と会うような心境だったとのこと。また、Niles 家のみなさんは高校生になった陽の成長に驚き、喜んでくれ、英語の上達をほめてくれました。それが彼女にはうれしかったようです。

「Makoto は洗濯のタイミングが合わず不機嫌になっていた」とか、「Makoto はしょっちゅう宿題をやっていて、Paul がさびしがっていた」という、もう完全に私は忘れていたホームステイ中の恥ずかしいエピソードを私のホストマザーの Paulette さんから聞かせてもらったそうです。これって、もはや父親の子ども時代の情けない話を祖母が孫に聞かせてるのと同じですよ！ でも、このことを陽から聞いて、40年以上も前のできごとをこんなにもつぶさに覚えていてくれたのかとうれしくなりました。

私たちにとって Niles 家のみなさんは「もうひとつの家族」であり、お互いが人生においてかけがえのない存在です。40年以上のあいだ育ててきた、このすばらしい関係が世代を超えてつながっていることに私自身あらためて気づき、感動しています。

陽自身にも新たな種がまかれました。いまはまだ芽ぶいたばかりでそのたいせつさに気づかないかもしれませんが、だいに育てていってほしいと願っています。この出会いに巡りあえた幸運と、これを与えてくれたラボ国際交流には感謝でいっぱいです。



2023 夏～左から…私のホストの Paul, 私のホストマザーの Paulette, Paul の姉 Dana, 陽, Dana の夫 Bob, Dana の長男 Keith, Dana の次男 Austin。

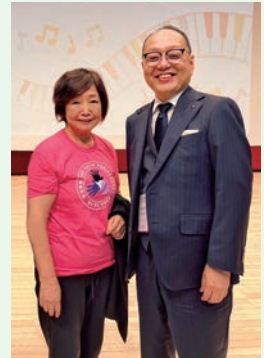
アメリカ4Hと合同会議開催

ラボ国際交流の主たる交流団体であるアメリカ4Hとの合同会議が11月9～10日にオンラインで行なわれました。9日はノース・カロライナ州に集った4Hの理事とミーティングを行ない、まず、ラボ国際交流センターの林 浩司代表理事があいさつ。その後、2024年の各州の受入れ希望状況について確認したり、ラボ国際交流50周年記念動画コンテストの大賞3作品を紹介したりしました。10日は各州のコーディネーターとのミーティングで船橋由佳利チューター(愛知県)がラボ・チューターを代表してあいさつをし、上記コンテストで大賞をとった船橋パーティ(教室)の動画について話をしました。

韓国ラボ50周年記念式典

ラボ・韓国青少年交流の交流先団体である、社団法人韓国ラボが設立50周年を迎え、その記念式典「韓国ラボ50周年記念家族芸術祭」が、10月14日、ソウル市内の韓国放送会館 KOBACO ホールで開催されました。日本のラボを代表してラボ国際交流センターの林 浩司理事長が参列して祝辞を述べました。当日は、映像による韓国ラボ50年の歴史をふり返るプログラムもあり、韓国ラボと交流のある台湾新羅教育文化財団や、秋田県大仙市国際交流協会からお祝いのビデオメッセージも届いていました。

芸術祭らしく、韓国ラボのみなさんによるくふうをこらした合唱の発表や、韓国ラボOB・OGによる激励の演奏、また日本から友情出演したラボ・チューターのパフォーマンスなど、会場は熱気に包まれました。



ソウル支部長のキム・ホスクさんとラボ国際交流センター・林理事長



合唱を披露する韓国ラボのメンバー。表情は真剣そのもの

韓国ラボは設立以来、「言語を学ぼう 언어를 배우자」「心を開こう 마음열자」「国際人になろう 국제인이 되자」という3つのスローガンをもとに教育プログラムを実践してきました。私たちと同じ「ラボ」という共通点をもつ隣国のきょうだいとして、これからも青少年交流を軸とし、さらに力強くともに歩んでいきます。



韓国ラボのチューターも歌を披露



大人も子どもも楽しく学べる 音声学入門 ～小学生が大発見!?

川原繁人（慶應義塾大学教授）

慶應義塾大学言語文化研究所教授。2002年国際基督教大学にて学士号（教養）、2007年マサチューセッツ大学にて博士号（言語学）を取得。ジョージア大学・ラトガーズ大学にて教鞭をとったのち、現職。専門は音声学、音韻論。

今回の講座では川原氏が、著書の内容もふくめ、大学での試みや、小学校の特別授業でされた音声学についての授業などを紹介しつつ、音声学を広く知ってもらうための取りくみをお話しされた。

川原氏の主な著書

『音とことばのふしぎな世界——メイド声から英語の達人まで』…（岩波書店）
『「あ」は「い」より大きい!?—音象徴で学ぶ音声学入門』……（ひつじ書房）
『ビジュアル音声学』……（三省堂）
『言語学者、外の世界へ羽ばたく～ラッパー・声優・歌手とのコラボからプリキュア・ポケモン名の分析まで』……（教養検定会議）

『音声学者、娘とことばの不思議に飛び込む～プリチュウからカピチュウ、おっけーぐるぐるまで』……（朝日出版社）
『フリースタイル言語学』……（大和書房）
『なぜ、おかしな名前はパピペポが多いのか？ 言語学者、小学生の質問に本気で答える』……（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

大学生であっても「国際音声記号の表を覚えなさい」とか「以下から両唇音でない音を選びなさい」という授業では音声学がつまらなくなってしまうことが多い。そこで考えたのが川原氏の娘さんが好きだった「プリキュア」のキャラクターの名前に法則性があるのか、ということ。調べてみると、ピーチ、パイン、ミントなど、両唇音（上下の唇を閉じることで発音する音）から始まる名前が多い。この理由は、赤ちゃんの発音を考えるとわかってくる。彼らにとって最も重要な哺乳行動は両唇を閉じて長時間吸い続けることであり、最初の喃語には両唇音が多い。ちなみにさまざまな言語での「母」の呼称は以下のよう。両唇鼻音が多く含まれる。

英語：mother, ドイツ語：mutter, フランス語：mère,
日本語：mama, 韓国語：emeoni, ハワイ語：makuahine,
ズールー語：umama

次に「ポケモン言語学」について。「ピィ」と「グラードン」のどちらが大きいでしょう？「ポケモン」のことを知らない、いろいろな言語の話者が、濁音があるほうが大きいと感じる。ポケモンの高さ、重さと名前に含まれる濁音の多さは比例する、という研究もある。

ところで濁音を出すときは口腔が広がる。これをキープするのはたいへん。促音の「っ」と濁音をつなげて発音するのは避けられる。つまり、ニッポン（日本）、ニッカン（日韓）というが、ニッペイ（日米）とはいわない（ほかに日独、日豪などでも、「っ+濁音」は現れない）。

こうした音声学のおもしろいところを抽出して書いたのが右の本。これを小学校時代の恩師に送った流れで、小学校で音声学の特別授業を行なうこととなった。彼らからの質問や疑問はすばらしかった。

- ・日本語には「ㇰ」や「ㇱ」がつく文字とつかない文字があるのはなんでですか？



- ・ぱぴぷぺぽの言葉はよく聞くけど、なんで英語の言葉が多いの？ ※「パン」「ピアノ」「プリン」「ペン」「ポテト」など
- ・よくお菓子の商品名に「パ」とか「ピ」とかがつけられているけどなんで？ ※「パピコ」「パイの実」「チョコパイ」「アポロ」「ポイフル」など

これらの質問から音声学の本質的なことまで話すことができた。「パ行」のことばについては、「いまの日本語には外来語にしかパピペポは出てこないね。この性質を利用して、お菓子の名前も外国から来たオシャレな名前というイメージでパピペポを使った、ということなんだろうね」と話すことになった。

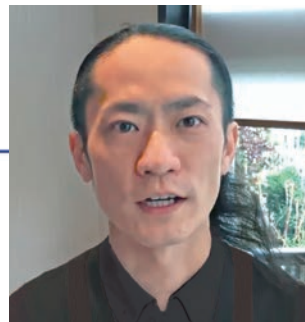


教える際は「教えてしまう」のではなく、自分で考えてもらうのが基本だし、音声学も自分で発音して感じられることがほしい。「濁音は喉の奥が揺れてる」と小学生が自分で見つけた。知識として知らなくても感じて見つけた。子どもたちが発音がどのようにされているかを意識して発音することで自分が見つかることばについて発見できることはすばらしい。

また日本語が変化してきたことも話した。旗がパタパタ、ブルブル震える、ピカピカ光る……昔、「は行」は「ば行」で発音していたこと。だから「ひよこがピヨピヨ、でなく、ひよこがピヨピヨ鳴いたんだよ」と。母は「ばば」と発音したから、と室町時代のなぞなども紹介した。「母は二度会いたれども、父には一度も会わず」。

小学生対象の特別授業を通してわかったことは、音声学は本質を外さないままで楽しく教えられるし、小学生であっても自分の発音をあらためて見なおし、楽しい時間を過ごせるということ。また、小学生ならではの発見もある。

大学生であっても、おとなであっても同じこと。ことばのおもしろさ、ふしぎさを体験してもらうことは、言語学者のもっともたいせつな仕事である。（文責：編集部）



人は文化。るっぽ 増埜としての店

奥啓太
オーナーソムリエ

2004年、中学2年生の夏。アメリカのサウスダコタ州にラボ国際交流で1か月間ホームステイをしました。正直なところ、日々のくわしい思い出は記憶から薄れています。しかし、空港からホストファミリーの自宅へ向かう車内から見た地平線と、ステイ中にふれたさまざまな文化は現在でも自分のなかに色濃く残っています。

ホストのおじいちゃんがネイティブ・アメリカンで、ステイ先がスー族の聖地にほど近かったこともあり、ホストファミリーはさまざまな場所へ私を連れていってくれました。その頃の私はあまり知識がなかったので、1か月間でふれた膨大な情報は自分のなかで消化しきれないまま帰国した覚えがあります。



ホストたちと習字をやってみた

その後、年月を経て社会人になりました。さまざまな土地で予備校講師、野外音楽フェスティバルのスタッフ、富士山の山小屋のスタッフ、バー、完全予約制レストランなどの仕事に就きました。19年前の夏の1か月間、膨大で多様な文化にふれたおかげか、社会人になってからも可能な限りこの世のありとあらゆることを経験したかったのだと思います。

いろいろな職業と土地を経たおかげで、大企業の社長や著名な方、はたまたヒッピーのような生活をしている方……さまざまな方と出会い、お話しさせていただき、いつの間にか「一個人が文化そのものである」という考えにたどりつきました。

「いろいろな文化・情報が集まる場をつくりたい」。いつしかそう思いはじめ、飲食店がまさにそういった場なのではないか、またそのようなお店をつくっていきたく考えるようになりました。

名古屋で働いていた予約制レストランを退職した後、2023年の8月にいまのお店をオープンして、4か月ほど経ちました。多くの方の御助力などもあり、忙しい日々を過ごしています。お客さまにも恵まれ、

いろいろなバックボーン・文化をもった方々にご来店いただき、増埜(るっぽ)のように文化が入り混じっているお店になってきています。お店のもうひとつのコンセプトが「世界各国の料理とお酒、音楽のペアリング」です。現在までの人類が培ってきたいろんな文化をお店に集まる「人」という文化にかけ合わせて、増埜としての場になり、おもしろい新しい文化の創造の一端を担っていければと思っています。

<経歴>

小1から大学卒業までラボ・パーティに在籍。2004年北米交流に参加。大学卒業後に予備校に入社し、講師を務める。その後、野外音楽フェスティバル(頂-ITADAKI)スタッフ、バー、富士山の山小屋スタッフ等を務める。2015年より三重や名古屋のミシュランガイド掲載の予約制レストランに勤務し、メートル・ドテル(レストランの給仕係の長)、サブマネージャーとして接客に従事。2023年8月に三重県にて独立開業(飲食店経営)。

おく けいた = Dos de groove (バー) 店主/オーナーソムリエ
(三重県・西川恵子パーティ/野村邦子パーティ OB)

Information

●(一財)ラボ国際交流センター理事会・評議員会

11月22日(※)に、対面とオンラインの併用で、2023年度上半期事業報告を主たる議題として理事会と評議員会を合同で開催。今夏実施の諸外国訪問プログラム、また4年ぶりに実施した受入れプログラムが写真を交えて報告されました。「東京言語研究所の諸活動」「役員の職務執行状況」「会員の承認」についてなど、本会議におけるすべての議案が承認されました。

<国際友好親善事業>

■海外からの青少年受入れプログラム

ニュージーランド(43名来日予定)

日程: 2023年12月15日(※)~2024年1月6日(※)

<東京言語研究所>

■公開講座

日程: 2024年1月27日(※)

時間: 14:00~17:00

講師: 今井むつみ(慶應義塾大学教授)

演題: 言語の本質(仮題)

■集中講義

日程: 2024年3月23日(※)~24日(※)

講師: 秋田喜美(名古屋大学准教授)

演題: 未定

■理論言語学講座: 2024年5月開講

要項掲載開始予定: 2024年2月中旬

申込開始: 3月下旬

※詳細については東京言語研究所ウェブサイトに掲載します。

<https://www.tokyo-gengo.gr.jp/>